

学習設計支援ツール開発に向けた 海外におけるサービス・ラーニングの原則及び基準の調査分析

Analysis of principles and criteria for service-learning in overseas
toward development of support tools in service-learning

石田 百合子*1, 根本 淳子*2, 松葉 龍一*1, 鈴木 克明*1

Yuriko ISHIDA, Junko NEMOTO, Ryuichi MATSUBA, Katsuaki SUZUKI

熊本大学大学院教授システム学専攻*1, 愛媛大学*2

Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University, Ehime University

〈あらまし〉高等教育におけるサービス・ラーニング (SL) の実施が年々増えているが, SL として実施されているなかには, 学生が活動したことだけに注目し, 学生自身が何を学んだかを確認する機会がないものも存在する. 本発表では, 先行する海外における SL の原則や基準等を調査・分類し, SL が成立するための条件を整理した一覧について報告する. 今後はこの一覧をもとに, 日本の高等教育の現状にあわせた SL の学習設計のための導入ガイドやチェックシート等の支援ツールを開発する予定である.

〈キーワード〉 高等教育, サービス・ラーニング, 学習設計支援, アクティブラーニング

1. はじめに

多くの高等教育機関でサービス・ラーニング (以下, SL) を取り入れた教育が推進されているが, 地域のボランティアや企業等でのインターンシップとの混同が生じたり, SL の定義や教育的効果がきちんと理解されないまま導入されているケースも見受けられる.

SL には, 授業の必修カリキュラムの学習目標と一体化した学究的な SL (academic service-learning) と, 近年増えている正規の授業カリキュラムの枠外で行われる, 教科的なものに重点を置かず, 実社会における汎用的能力を養う共同カリキュラム (co-curricular service learning) と呼ばれる形態も生まれている (ファーコ,2014). カリキュラムと連動する事例としては, 福祉系学部で行われる福祉施設での実習等があるが, インターンシップの意味合いを含んでいたり, 特定の分野に限定されている印象がある. また共同カリキュラムは, 部活動やサークル活動で行われる場合も含め, 内容や活動形態もさまざまである.

このように, SL は教育手法としての方法論が確立されておらず, 教員もどのように SL を設計し, 自らがどう関わり, どのように評価するかは手探りの状態である. そこで, 今後 SL を導入を予定する又は既に取り組んでいる教員らが, 学生

にとって教育的意義のある SL の設計になっているかを確認するための学習設計支援ツール (例えば, チェックリストや指針となるガイド) が必要だと考えた. そこで, 本研究では海外での SL に関する原則や基準等を調査分析し, 一覧に整理することで, ツール開発に向けての考察を行った.

2. 海外における SL の原則, 基準の分析

以下のステップに従って, 海外における SL の原則, 基準の分析と考察を行った.

〈ステップ1〉

国内及び海外の SL 実践事例等に関する論文及び書籍を調査し, SL の学習設計に資する基本的考えがまとめられている以下の3つの項目の内容を整理することとした.

- ・「SLを成功させる10の原則」(Howard,2001) (第一筆者が日本語訳)
- ・1993年にASLERが示した「SLの11の基準」(唐木,2010)
- ・「SLによって示される良質な教育学的要素」(ファーコ,2007)

〈ステップ2〉

それぞれの項目の説明文をもとにラベル(分類)をつけて, 類似の内容を示す項目をグループ化し, 一覧にまとめた(表1). 表1からSLのチェックリスト作成に向けての考察を行った.

3. 結果と考察

- ・SLを成功させる条件として8つに分類することができた。
- ・学習目標について1つの項目で整理されていたのは「SLの10原則」のみである。しかし、「SLの11の基準」では基準1.においてSL実践には明確な学習目標が必要であるとしており、またファーコ(2007)の良質の教育学的な要素では、エンパワメントの項目のなかで、学習者が自ら活動計画を立て、活動の責任ある立場を担うことで自信やリーダーシップ能力の形成を促すことを示しているため、学習目標の分類にも含めることとした。
- ・コミュニティ、参加学生、教員とのコミュニケーションに関する項目やICTツールの活用に関して言及されている項目はなかった。

4. 今後の課題

今回は、海外でまとめられたSLに関する原則等を整理したため、日本における実状には必ずしも合っていないと思われるものも含まれる。また原則、基準、要素と異なる位置づけのものをまと

めたため、個々の項目が意味するところの更なる精査が必要であろう。これらを踏まえたうえで、今後は表1の一覧をもとに、実際の日本の高等教育で行われているSL事例との対比を行う。特に3.で示したICT活用については、原則が作成された当時との状況が異なることから丁寧に調査等を実施したい。そのうえで、SLの学習設計を支援するのに必要な項目を抽出し、支援ツールとしての開発を進める予定である。

参考文献

- Howard, J (2001) Service-Learning Course Design Workbook, Michigan Journal of Community Service Learning, Summer 2001, Companion Volume, OCSL PRESS, The University of Michigan.
- 唐木清志 (2010) 『アメリカ公民教育におけるサービス・ラーニング』, 東信堂
- ファーコ, アンドリュー (2013) 「サービスラーニング: 学習資源としてのコミュニティ」(荻野亮吾訳), OECD教育研究革新センター編『学習の本質』(立田慶裕・平沢安政監訳), 明石書店

表1 SLを成功させるための条件の整理

分類	SLを成功させる10の原則 (Howard, J, 2001を第1筆者が日本語訳)	SLの11の基準 (ASLER, 1993) (唐木, 2010より引用)	SLによって示される良質の 教育学的な要素 (ファーコ, 2007) (OECD教育研究革新センター, 2014より引用)
1 ServiceとLearningのバランス	原則1: 学習単位はサービスに対して付与するものではなく、学習することで付与される 原則2: 学問的な厳密さを失わない	1. 効果的なSL実践は、サービスと学問的な学習の両者を効果的なものにする 6. 生徒が遂行するサービスは、コミュニティにとって意義あるものである	真正性 真正の学習機会
2 学習目標	原則3: 学習目標を設定する	1. 効果的なSL実践は、サービスと学問的な学習の両者を効果的なものにする。	エンパワメント 学習者をカブつけること
3 事前準備・学習戦略	原則5: コミュニティ学習を取り入れたり、コースの学習目標を実現するための教育的な根拠に基づく学習戦略を提供する 原則10: コースのなかでの社会的な責任の方向付けを最大化する	3. 準備とリフレクションがSLの本質的な要素である	個別化 個人のニーズと関心を満たすこと 構成主義 構成主義的アプローチ
4 学習成果・評価	原則9: 学生の学習成果のばらつきやいくつかの制御の損失に対する備えをする	7. 効果的なSLは組織的で形成的かつ累積的な評価を統合する	-
5 地域との関係	-	8. SLは新しく建設的な方法で学校とコミュニティを結びつける 9. SLは学校とコミュニティの生活における統合的な要素として理解され、支援されるようになる	-
6 活動場所	原則4: 紹介先を選択する基準を設定する	2. 理想的なSLは、生徒に、新しい技能を習得し批判的に考える機会、危険を受容し、報酬を得る能力を発達できる環境で、新しい役割を試す機会を提供する	境界の拡張 安全地帯を飛び出ること
7 学生・若者	原則6: コミュニティから学ぶ学生を準備する 原則7: 学生のコミュニティ学習の役割と教室での学習の役割の違いを最小限に抑える	4. 生徒の努力は、生徒が奉仕する仲間やコミュニティによって認められる 5. 若者が計画の段階に含み込まれる	積極的参加 積極的に生徒を関わらせる 協働 協力や連携、協働を築くこと エンパワメント 学習者をカブつけること
8 教員・大人	原則8: 教員指導の役割を再考する	10. 洗練された大人の指導や監督がSLの成功にとって必要不可欠である 11. SLの哲学や方法を含んだ教師教育あるいは現場教育が、プログラムの質と継続性を維持するには最も必要である	-